



Aesthetics and Science of Literary Arts

美学・文芸学専修

美学研究室は、美学思想をさまざまな芸術とのつながりから理解することを重視してきました。現在はさらに、美学という学問がいかに日常生活と関わりを持つのかにも関心を向けています。美学が積み重ねてきた議論は、分野を横断するアートを考察するうえで有効ですし、デザインの歴史について考える手がかりにもなります。今日ますます芸術を定義するのが難しいのは、周縁がたえず更新されて輪郭が定まらないからでしょう。ならば、芸術をその周縁から考えるのは一番有効な方法です。そして、既存の芸術ジャンルに制約されない美学こそが周縁分野に足を踏み入れることができます。

文芸学研究室は、芸術学の一分野として、文芸および文芸に関わる事象全般を研究対象としてきました。具体的には、文学作品・文学理論・思想・神話・伝承などが主たるものとなります。アリストテレス『詩学』に代表される文芸学の古典を学ぶことの重要性から講義や演習は古代ギリシア・ローマの文芸に関するものが中心となっていますが、文芸学研究室に所属する学生は、どの地域・時代・言語のものであっても卒業論文での研究対象に選ぶことができます。卒業論文では基本的に、ある作品やある作家の思想など、個別のものを扱うこととなりますが、それを通じて、文芸という事象全般への洞察も深めます。

<https://www.let.osaka-u.ac.jp/bigaku/> (美学)

<https://bungeigakubungeiga.wixsite.com/mysite-1> (文芸学)

何を学んでいるの？

美学

学部生向けの授業では、美学の基本問題について概観するとともに、芸術について論じるうえで欠かせない用語について検討します。芸術は定義できるのか、作家の意図はどれほど重要なのか、表現とはいかなる行為かなどです。学びをとおして、芸術だけでなく身の回りの物事について論じる能力をやしません。

文芸学

講義や講読では、古代ギリシア・ローマの神話・文学・思想を文芸学の基礎として学びます。卒業論文作成演習では、発表と質疑応答を経て、各学生の研究を進展させていきます。

どんな授業があるの？

【講義題目】

美学概論

——5つのステップで学ぶ

芸術学基礎

近代デザイン 現代デザイン

映画と空間

ギリシア悲劇入門

【演習題目】

カント『判断力批判』を読む

芸術研究 A / 芸術研究 B

文芸学文献講読

ラテン語文献講読

教員

たかやす・けいすけ

高安啓介 教授

わたなべ・こうじ

渡辺浩司 教授

たなか・ひとし

田中均 教授

あずま・しほ

東志保 准教授

にしい・しょう

西井奨 准教授

ふくしま・かなこ

福島可奈子 助教

教員が選ぶ印象に残った卒業論文

『カレワラ』における呪術表現について

——リョンロートの編集状況から

フィンランドの民俗詩を基に編纂された叙事詩『カレワラ』を、原典のフィンランド語から丹念に読解し分析した力作である。編纂者リョンロートが『カレワラ』で「古代フィンランド人」の呪術信仰の在り方を描くにあたり、「良いペイガニズム」として描くのを意図していたとする。(選：西井奨准教授)

【卒業論文題目】

勅使河原蒼風の彫刻とその評価

——いけばな性をめぐって

精神障害者の芸術における障害と作品の関係
1930年代の書字教育と女学生の身体性の問題
グリム童話「白い蛇」における飲食による能力の獲得について

芸術のフロンティアを開拓する。

美学

芸術系の学問分野にあって、美学研究室は、複数の芸術分野をまたがる問題や取り組みについて論じたり、美術・演劇・音楽といった既存のジャンルにおさまらない芸術について調べたり、芸術かどうか評価のさだまらない事柄について考えたりします。美学研究室では、哲学分野としての美学について詳しく学ぶか、美学の議論をふまえて、さまざまな事象について論じるかのいずれかになります。

分野を定める

学びと探究が散漫にならぬように、分野を定めます。美学思想であるか、陶芸・衣服・映像・写真・音響

や、情報デザインや、現代アートなど、卒業するまでに何か一つ分野について他の人より詳しくなって自信を持って話ができることを目指します。分野を定めたら、歴史の流れと通説を押さえておきます。自分の研究を始める下準備です。

キーワードを定める

美学研究室では、事実関係を明らかにするだけでなく、物事を根本から考えることを重視します。そのため、自分の問題関心を一言であらわした研究キーワードを定めます。装飾・色彩・空間・身体といった語がそれです。陶芸の研究ならば、焼きものとは一体何なのだろう、焼いてな

い焼きものは焼きものなのか、というように、〇〇とは何なのかは、哲学分野としての美学らしい問いだと言えます。

題目を定める

キーワードを定めたら、自分の研究テーマに簡潔なタイトルをあたえます。例えば「生活の道具としての民藝の展示の問題」というようにキーワード「民藝の展示」に込められた問題への取り組みかたが一目で分かるようにします。ゼミでは、分野・キーワード・題目をおたがいに確認し合いながら、研究の進み具合を報告します。



文芸の本質と構造を解明する。

文芸学

文芸学とは？

文芸という言葉からは、「小説や詩、脚本などの創作を自ら実践する」というイメージを抱きやすいかと思われれます。実際、芸術大学で「文芸」の名を冠する学科・コースがある場合、そのような実践を重視するところがほとんどでしょうが、当文芸学研究室ではそのような創作の実践には取り組みません。文芸学では、自分の興味と関心に応じて、これと決めた作家の作品や、神話・伝承を伝える文献を入念に読み込み、必要とあれば新しく外国語も学ぶ。そしてその作品等に関して、まだ明らかになっていない問題を発見し（これ

が難しい）、その問題に対して、当該作品の一節や他の様々な文献資料を根拠としながら論考を進め、最終的に自分オリジナルの結論を導き出す。これが基本となります。文芸学研究室では卒業論文のテーマをかなり自由に選べますが、それはいい加減に取り組んでもよいということではありません。むしろ自由に選べるからこそ、「この作家のこの作品のこのテーマに関することだけは、自分は誰よりも専門家だ」と言えるほどにまで、突き詰めて取り組む必要があります。そうなると、選ぶテーマは自ずと狭く絞り込まれてきます。しかしまた一方で、「文芸の本質と

構造を解明する」という広く大きなテーマも文芸学は掲げています。何をもってして文芸の本質と構造を解明したと言えるのか、ということも難しい問題ではありますが、そのことを頭の片隅に置きながら個別の研究を進めていくことが文芸学という学問の営みだと言えます。文芸学の基礎として西洋古典学関連の授業を開講し、古典ギリシア語やラテン語の講読・演習もありますが、それらを必修としているわけではありません。文芸学研究室で自分が何を学び何を研究するかは、常に自由に開かれています。